



文化資源学会シンポジウム

スマホで覗く美術館

— 鑑賞体験のゆくえ —

日時 2018年 7月14日(土) 14:30-16:30

会場 東京大学本郷キャンパス 国際学術総合研究棟 3番大教室

予約不要 先着順 300名 **主催** 文化資源学会

スマホで覗く美術館 —鑑賞体験のゆくえ—

問題提起

長い間、美術館展示室での写真撮影は著作権保護を理由に禁じられ、誰もそれを疑いませんでした。ところが、最近では写真撮影を許すどころか、逆に推奨する美術館が増えてきました。すべての展示物の撮影を認めて、「ツイッターやインスタグラムでハッシュタグ「#yokotori」をつけて投稿しよう」（横浜トリエンナーレ2017）と呼びかけた例はあるものの、多くの場合、美術館は展示の一部の撮影を許し、SNSによる発信を広報活動の一部とらえるだけです。

しかし、SNSは美術館における鑑賞体験の在り方を根本から揺るがしています。実際、撮影を許された展示室では、観客は「見る」ことよりも「撮る」ことに忙しそうです。そこに自分が「いる」ことを他者に「伝える」ことが大切なのです。「見る」べきものはどこに行ってしまったのか。こうした行為は従前の芸術鑑賞とは大きく異なっており、翻って、美術館はなぜ「凝視」と「沈黙」をセットで強いてきたのかということを考え直すよい機会かもしれません。

実は、百年前の「凝視」のひとつと、白樺派同人が目にしていたものは印刷された複製図版であって、本物ではありません。現代のネット空間を行き交う画像も、高精細ではあっても本物ではありません。美術館はそこに足を運んでもらい、本物の芸術作品と向き合う機会を提供する施設として歴史を重ね、それゆえの公共性を認められてきました。特別な場所、特権的な場所でした。しかし、「本物」とは何かが問われ、一方に表現者がいて一方に鑑賞者がいるという関係も変容しています。美術館の外側には、いくらでも表現と体験の場が生まれています。スマホを手を訪れるひとつとが美術館の未来をどう変えてゆくのか議論したいと思います。
(木下直之)

プログラム

14:30 問題提起 木下直之（東京大学・静岡県立美術館）「スマホを持って美術館へ」

14:50 報告1 鈴木禎宏（お茶の水女子大学）

「凝視」という作法の成立：白樺派の美術館構想を中心に」

美術作品を一心不乱に熟視する—これは鑑賞の方法であるだけでなく、美術館での作法でもある。この作法の成立について、大正時代の雑誌『白樺』同人たちの活動を中心に考える。

15:10 報告2 片多祐子（横浜美術館）

「武者小路実篤の「夢」から100余年—日本におけるロダン《接吻》の鑑賞をめぐる」

横浜美術館の「ヌード NUDE—英国テート・コレクションより」展では、ロダンの大理石像のみ、展覧会周知の目的で来館者の撮影を許可した。撮影の容認によりもたらされた鑑賞体験の変化や、時代が美術館に何を求めているかについて考察する。

15:30 報告3 鷺田めるろ（キュレーター）

「美術館を開く「ながら鑑賞」」

何かをしながら別のことをすることは、マナーを欠き、危険だとされる。だが、「鑑賞」自体のあり方を変えるスマホの普及は、閉鎖的な美術館を開くことに一役買っている面もある。遍在する、〈気散じ〉的な「鑑賞」の可能性とは。

15:50 休憩

16:00 パネルディスカッション「スマホが変える美術館の未来」

ファシリテーター 稲庭彩和子（東京都美術館）



2018年 7月14日（土）14:30-16:30

会場：東京大学本郷キャンパス

国際学術総合研究棟 3番大教室

文化資源学会事務局

〒113-0033 文京区本郷7-3-1

東京大学大学院人文社会系研究科 文化資源学研究室内

Tel : 03-5841-3722 E-mail : info@bunkashigen.jp